

拝啓、35 の君へ

東京大学物性研究所教授 勝本信吾

1994 年度「強磁場下の複合粒子の検証実験」で山田科学振興財団のご援助をいただいた。当時私は着任したてで、金も人もなく、がらんとした実験室で一人で朝から晩まで汗水たらして実験装置を組み立てる苦しい毎日を送っていたので、この援助は大変ありがたく、張り切って研究に取り組んだ。

ところがそれから順調、というわけには行かない。援助獲得のため掲げた目標は当時の研究室の実力からすると不可能ではもちろんなかったと思うが相当高いものだった。難しい点は色々あり、何しろ超高移動度の 2 次元電子系を作らねばならず、製膜装置との格闘の日々が続く。注目度の高い研究テーマであるだけに、こちらが考えていたことと類似の結果を先に発表されてしまうこともしばしばだった。結局予定研究期間で「何とか複合粒子の兆候が見える」程度の結果を出すのが精一杯で、96 年度の研究交歓会では赫々たる成果を挙げた先生方に混じって肩身の狭い思いをしなければならなかった。

ただ、この時開始した 2 次元電子を微細加工して測定する研究は何とか一定の成果があり、単電子の帯電効果と量子干渉効果が同時に見える実験結果が出て、援助期間も終わるころになってようやく研究が進み始めた。亀の歩みも段々と高みに登り、何とか「花が咲いた」と思えるようになったのは世紀末の 2000 年頃である。この間、もちろんそれなりの仕事はし続けていたが、餓首されることもなく、援助金を返せとも言われなかったのは幸いであった。

自然科学の研究は、言うまでもなく、自然との対話である。自然とはただ 1 つのものであるはずだが、非常に多様な顔を持っていて研究者によって相手する顔は皆異なる。多弁で愛想が良いが、

本音はそうさらりと出さない顔、つんと取り澄まし無愛想で取り付く島もない顔、様々だが、文字通りの嘘は決してつかない一方、最初から素直に真実を教えてはくれない点ではどれも同じである。私に対話の相手に選んだのは筋金入りの頑固者だったらしく、まともに口を開いてもらうまでに 5 年もかかってしまったことになる。

何だか当たり前のことを書き続けてしまったが、今回、「研究援助のその後」について特に「研究生生活の中で見つけた幸福感」について書くように御依頼いただいて、すぐに頭に浮かんだのは平凡ながら以上のようなことである。自然が何かの真実を語ってくれた、と感じる以上の幸福感が、自然科学の研究生生活においてあるはずがないと思う。

今、私の手許にきれいな絵柄の表紙がついた 96 年度研究交歓会の要旨集がある。自分の原稿を見ていて、アンジェラ・アキの「手紙―拝啓、15 の君へ」のように、過去の自分の苦しい必死の叫びを聞いているような気分になった。もちろん、今も苦しみは消えたどころかもっと苦しい、と言っても良い日々であるが、この「幸福感」を感じることにはできるよ、という返信を送りたい。その機会を賜った山田財団に感謝申し上げる。

